

## 【最優秀賞】

団体名	和気閑谷高校魅力化プロジェクト
活動の内容（概要）	和気町では町内唯一の高校である和気閑谷高校と行政・産業界が連携してキャリア教育に取り組んでいる。町地方創生課が派遣する地域おこし協力隊がキャリア教育プログラム「閑谷學」をコーディネートするほか、町教育委員会は小中学校での放課後学習支援、出前授業、社会教育等の担い手として高校生を受け入れ、和気町商工会はインターンシップ、商店会は生徒の企画実現に協力するなど、町ぐるみで生徒のキャリア形成を支援している。

### 受賞理由

- 和気町が支援するキャリア教育プログラム「閑谷學」を基に、町内の小・中・高等学校の連携した取組を行政、商工会、地域事業所等が町ぐるみでサポートしており、高校生が地域の課題を取り上げた活動を展開する中で、学校と町が互恵的に協働していくことができるシステムが構築されている。
- 学んだことの発表や体験活動の場があり、高校生の承認欲求を十分に満たし、地域にプライドを持つことができる取組となっている。
- 教育委員会との協働で進めている小中学生に対する「放課後学習支援」は、高校生のキャリア形成支援に効果が高く、高校生の地域への関わりが中学生のキャリア形成支援となっており、発展性が高い。
- 計画、活動、評価、見直しのPDCAサイクルが確立しており、連絡会の実施や校内外の人々へのアンケート、生徒の到達度チェックなど、継続的な見取りが取組改善につながる取組になっている。
- 外部人材の活用による新しいカリキュラム作り、高校生が主体となった活動による地域課題の解決など、特徴ある取組が展開されているほか、国際性の観点からも優れている取組が取り入れられている。

### 連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

岡山県立和気閑谷高等学校、和気町教育委員会、和気町内中学校長、赤磐市教育委員会、赤磐市内中学校長、備前市教育委員会、備前市内中学校長、和気閑谷高等学校PTA、和気閑谷高等学校同窓会

【行政や地域・社会、産業界等】

和気町役場、和気町商工会、和気町内有識者、和気駅前商店会、地域おこし協力隊、地域おこし企業人 [(株) ベネッセホールディングス、(株) ALPHA Frontiers]、和気町内事業所多数（インターンシップ受入、探究学習協力）

### 活動開始の経緯

【活動開始時期】平成25年～ 【継続年数】5年

少子化による地域の衰退を防ぐためには教育の充実が重要課題という和気町の思いと、特色ある教育活動によって生徒の学力・意欲を伸ばし高校の魅力化を図りたいという高校の思いが一致し、平成25年度に魅力化推進協議会を立ち上げ、町内唯一の高校の魅力化を図る取組を開始した。

### 「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

和気閑谷高校の地域課題解決型学習（総合的な学習の時間）等に行政や産業界が以下のような協力・協働することを通して、地域の活性化を図るとともに地域に愛着を持ち地域コミュニティの担い手になる人材を育成し、高校の魅力化につながる課題解決能力を育む質の高い教育となることを目指している。

○和気町役場は、地域おこし協力隊や地域おこし企業人を学習の支援職員として高校に常駐させたり、役場職員や包括協定を結ぶ大学のゼミ等に高校での講師や運営補助として派遣したりしている。

○町教委は、高校主催行事への小中学生参加に向け、高校と小中学校とのつなぎ役等を担っている。

○町の商工会は、インターンシップを受入、講師派遣、商品開発支援等をしている。

○駅前商店会は、店頭スペースの提供やボランティアの受入れ、講師派遣等をしている。

そのほか、連携・協働する教育関係者、行政、地域、産業界の代表者が集まる連絡会を隔週で行い、情報共有し、同時に、地域が必要とすることや支援職員の活動内容と達成度を確認し、地域社会と高校双方の持続発展を指向した協業展開を目指している。あわせて、年5回の魅力化推進協議会では今後の方向性として2020年に向けた学校と地域の在り方を協議している。

### 「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

町は少子高齢化と人口減少による地域の衰退、それに伴う行政サービス低下や伝統文化の途絶えを防ぐために教育を核とした活性化を重要政策と位置づけている。高校生が地域課題型学習を通して地域の活性化に取り組むことで、町と学校が双方の持続発展を指向したwin-winの協業が展開できている。

毎年の活動終了後に、校内及び校外協力者のアンケートを基にカリキュラムの見直し、改善を加えている。例えば、平成28年度1年生「探究基礎」では、前期に「発見！和気閑谷高校の新事実」として校内をテーマに9講座、後期に「提案！和気の困りごと解決策」として和気町をテーマに8講座をそれぞれ展開していたが、平成29年度はこれらを併せ、年間を通じて「提案！地域に学ぶ和気高の問題解決」として5講座を展開。和気閑谷高校内の課題を解決するために地域を学習フィールドに調査し提案する。身近な問題と社会の問題の相似性に気付かせ、活動を通して調査・分析等の技法を身に付けることにした。このようにして、以下のような3年間のねらいと具体的な活動を系統的に計画し、情報活用能力、課題発見解決力、表現力を養い、キャリア発達、進路実現に向けた能力を継続的に養成している。

○1年次：自己と学問のつながりを調査し考察する。

○2年次：自己と社会（世界）とのつながりを体験・調査し考察する。

○3年次：自己とこれからの社会とのつながりを調査し提案する。

### 「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

和気閑谷高校では、生徒の実態把握、キャリア発達の到達度をチェックする方法の一つとして、「7つの力アンケート」を実施している。その結果から、「職業とつなぐ力」「考える力」「行動する力」「チームワーク力」の4つの力に課題があり、以下に重点を置いて展開している。

- ・自己の将来について夢や希望を持って具体的に考える
- ・異なる意見や他者を受入れ相互に認め合うことを通して協働して課題を解決する
- ・社会活動に当事者意識を持って参加し現在及び将来の学習に活かす
- ・社会のさまざまな事象を探求し自分の言葉で整理する



<高校生がサポートする放課後学習支援の様子>

就職希望者は全員2年次にインターンシップを行うが、受入は役場や商工会が窓口となり調整している。探究型インターンシップと位置付け、職業体験に加え「働くことに関する現代的課題」に対する仮説を持ち、体験やインタビューを通して仮説の検証や課題解決の提言をまとめる。論語や英語の出前授業、理科実験教室は小中学校と、English Camp や子ども塾閉塾式、放課後学習支援は町教育委員会と、それぞれ連携、協働し、高校生が小中学生の先生役として活動することで、高校生には責任感、自己肯定感の醸成、小中学生には身近なロールモデルの提示ができています。

### **「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など**

高校に対する地域社会の認知が変わり「頑張っている学校」「一緒に地域の課題を解決しようとしている学校」「頼れる学校」として協業の提案がなされている。中学校からはキャリア学習会の講師として高校生に参加依頼を受けるようになった。

年1回開催している「多様な主体による協働会議」では高校生と地域住民が喫緊の課題や地域の未来についてワークショップを通して考えている。平成28年度は次のような感想が出された。「高校生の皆さんと一緒に和気町、和気閑谷高校を楽しいコミュニティとして一体化したい!」「高校生は元気を与えてくれる。」「今日は高校生の若い力をたくさん感じることができました。お話を聴いて、私たちの活動は間違っていなかった、これでいいんだと確信することができ、元気が出ました。上手く回らず迷い困って力尽きそうになっている仲間へ帰って伝えて、一緒に前を向いて進めるといいなと思います。」「地元に住んでいても地元貢献する機会が無く過ごしてきたが、改めて何ができるかを考えてみようと思う。」

これまで高校教育に直接関係の無かった位置にいる大人たちの意識の変容「高校魅力化や地域の問題を住民自身に関係するものとして捉え、地域が生徒の教育の一部を担っていかこうとする主体性」が芽生えてきた。今後の発展性、方向性が見えてきている。

### **学校現場の評価・感想・コメント**

- 地域との連携による探究学習を深化、発展できている。地域課題への提案は机上のものではなく、具体的な提案を実践し、地域の求めるレベルへ改善していく内容であった。
- 「しごと」チームの探究型インターンシップは働くことについて考えると同時に地域がどのような人や仕事に支えられているかを知ることを通して、地域で学んだことを普遍化できる機会となっている。
- 3年間の探究学習プログラムを終了した平成29年3月卒業生の推移を見ると、男女とも1年探究学習開始前に比べ数値が上昇し、かつ、7分野の値のバランスがとれている。

### **関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど**

- 和気閑谷という地域に根差していく高校として、地域にある様々な教育資源を最大限に活用し、それを学校の軸に据えながら教育活動に取り組み、なおかつ地域と連携して、地域の課題を解決するだけでなく、それを外に広げていくという目線を子供たちに持たせる等、非常に多様な機会を子どもたちに提供している。これは、子どもたちを積極的に地域に開いていく、地域に教育の場を求めていく、その中で子どもたちが自律的な学習者、主体的な学習者として育てていくためのカリキュラムモデルを提示していると感じた。
- 一般的には教科ベースである公立高等学校に対して、新しいカリキュラムモデルを提供・提案することにつながっていると思う。領域融合的なカリキュラムや課題探究型の学習指導を中心に据えると、学ぶことに意欲を持てる子どもたちがいる。そして、その子どもたちの可能性を引き出すことができる。